

賢治ゆかりの地 穂別町を訪ねて



天竺大学看護栄養学部講師

根本 和雄

9月の中頃、宮澤賢治ゆかりの地・穂別町を訪ねた。穂別町で賢治がめざした理想の村づくりが始まったのは昭和22年（1947年）のこと。当時の穂別村の村長に38歳で就任した横山正明氏による。

横山氏は、その頃苦小牧に在住していた詩人・浅野晃氏の影響を受けて賢治に傾倒したという。浅野氏は、明治34年（1901年）に生まれ、東大法学部を卒業し、立正大学で教鞭をとる。わが国では珍しい思想詩人であり、昭和20年から5年間、苦小牧勇弘に疎開中し、その間に横山正明氏は浅野晃氏の偉大さに接し、以来生涯の師として大きな影響を受けることになる。



北のイーハトーブ

浅野晃氏の歌に次の一句がある。

賢治といひ 正明といひ
土に着きて

信深き故に 努め努めき

また、横山正明氏はこう詠っている。

神の住む
美しくき村、つくらんー
知性！
知性と美わしき感情で
村はそだたん

村役場から約200メートル北東の緑豊かな公園の一角に横山正明氏の歌碑がある。

いま、この二人の歌を読むとき、『碧巖録』^{へきがんろく}※に書いてある言葉、「啐啄同時」^{そつたくどうじ}を思い出す。

道を求める修業者が師に出会って、両者の呼吸がぴったりと一致したときに開悟の機縁に合うことができるといわれているように、横山氏が浅野晃氏という師に出会って、穂別村の理想の村づくりが始まることになる。

それは、宮澤賢治が『農民芸術概論綱要』の序論で述べているように、“世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない”と。そして、“われらは世界の幸福を索ねよう。求道すでに道である”と語っていることを、賢治に傾倒した横山氏は身を尽くして実践、茨の道を歩むことになる。

昭和29年に、理想の村づくりを願って「賢治観音（聖観世音菩薩）」^{せいこんせおんぼさつ}を彫像することになる。彫像は、高村光雲一門の佐藤瑞圭の手によって作られ、農民詩人・宮澤賢治の精神をいだき、賢治30歳ころの面影を漂わせている。その「賢治観音」は、いま旧国鉄富内駅を見下ろす丘の観音堂にたたずむ。

現在、旧富内駅は賢治が描いた理想郷「イーハトーブ」をイメージして「銀河ステーション」と名付けられている。駅前には、賢治設計の花壇「涙ぐむ眼」、また、近くには図書館「イーハトーブ文庫」があり、そこには賢治の作品をはじめ、宮澤賢治に関する貴重な資料が集められ、賢治の世界が広がっている。

※碧巖録（へきがんろく）

宋の雪竇重顕（980～1052）が禅修行の公案から100則を選び、自ら頌を付したものに、臨済宗の圓悟克勤（1063～1135）が著語と称する評釈を加えたもの。

穂別（ほべつ）の町名は、アイヌ語「ポンベツ（小川）」に由来し、人口3,964人、世帯数1,720である。町の木はアカエゾマツ、花はヤマツツジで、実に自然豊かな町である。穂別町は今年、開町90年を迎え、それを記念して、ビデオ映画「田んぼdeミュージカル」の続編が製作されている。役者は町在住のお年寄りが中心で、その8割は昭和一けた生まれである。戦前から農業一筋に生き抜いてきた家族を描いて、完成は来年2月の予定とのこと。

「銀河鉄道の里づくり」が始まったのは、昭和61年の国鉄富内線廃線の時からで、産業遺産として駅舎やレールの保存、賢治設計の花壇「涙ぐむ眼」の植栽やさまざまな行事と生活環境づくりに町民が参加して、宮澤賢治の精神である共生と共存の願いをこめて、みんなの手で町づくり、地域づくりの環が広がっている。

その活動が高く評価されて、平成5年に花巻市イーハトーブ賞、さらに平成11年には自治大臣賞を受賞している。

また、平成15年には北海道開発局が実施している「わが村は美しくー北海道」運動第1回コンクールでの人の交流部門で、「ほべつ銀河鉄道里づくり委員会」が北海道開発局長表彰を受けている。それは、賢治の精神を生かした、地域の核となる北の「イーハトーブ」実現をめざしての町づくりが評価されているからである。

賢治の精神を生かした地域づくりの里・穂別町を訪ねて感じたことは、地域づくりには“豊かな心”と“豊かな感性”が求められているということだと思う。そこには、生きものが互いに譲り合って生活していく「共生」の姿と、自然への感謝の気持こそが大切であると痛感せずにはられない。

賢治が『農民芸術概論綱要』で述べている“新たな時代は世界が^{ひとつ}一の意識になり生物となる方向



富内 涙ぐむ眼



宇宙へのぼる鉄路

にある”ということは、まさに自然との共生にほかならないと思う。

さらに続けてこう語っている。“正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである。われらは世界のまことの幸福を索ねよう求道すでに道である”と。

宇宙飛行士毛利衛さんのアイデアで設置された宇宙へのぼる鉄路を見つめると、力強くたくましく未来に向かって生きる希望がわいてくる。いま、穂別の「銀河ステーション」は、地域の人々の輝ける希望と夢を乗せてスタートし始めているのだと思う。

profile 根本 和雄 ねもと かずお

1937年盛岡市生まれ。’60年岩手大学学芸部（現教育学部）卒業後、平和台病院（精神科）、アレン国際短期大学助教授（精神保健学）を経て、’77年光塩学園女子短期大学教授。現在は天使大学看護栄養学部講師、北海学園大学非常勤講師を務めるとともに、月形刑務所等の面接委員、防衛庁北部方面隊カウンセラーなど、メンタルヘルス分野で多岐にわたって活躍中。また、銀河系いわて大使を務め、宮澤賢治に深い関心を持ち研究している。主な著書に『理解とふれあいの心理学』（ミネルヴァ書房）、『熟年からの心と体の健康学』（中央法規）、『こころの窓』（アイワード）など。